

平成21年 5月15日現在

研究種目： 基盤研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19320065

研究課題名（和文） 言語接触論から見た日本語の多様性に関する総合的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on the Diversity of Japanese from the Viewpoint of Language Contact

研究代表者

工藤 真由美 (KUDO MAYUMI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30186415

研究成果の概要：本研究では、国際的にも大いに多様化の進んでいる日本語のバリエーションの問題について、言語類型論 (Language Typology)、言語接触論 (Contact linguistics) の立場から包括的に考察を試みた。具体的には、格やとりたて構造に関する言語項目調査について、諸方言に適用できる「統一した調査票」の改善についての検討を行った。また、ボリビア共和国サンタクルス県オキナワ移住地を対象とする言語的日常生活を描くエスノグラフィー的研究や、ドイツをフィールドワークとする、言語接触論的観点からの在外駐在日本人の言語生活調査を実施した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2008年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
年度			
年度			
年度			
総計	9,800,000	2,940,000	12,740,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語接触論、ウチナーヤマトウグチ、コロニア語、移民社会、エスノグラフィー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、とりわけ多言語文化圏を擁する欧米の言語学における言語接触論の観点を重視し、日本国内における言語接触現象の典型例である諸方言のバリエーションや、沖縄の日本語バリエーションともいべきウチナーヤマトウグチなどを、従来の「国語」中心型の日本語観を脱する「脱中心性の視点－複数の日本語」という観点において多角的に考察しようとするものである。さらに、かかる脱中心性を広く海外に対して射程を広げ、日本語を社会移動の観点から再検討するこ

とで、ブラジル沖縄系移民や、従来全く看過されていた在外駐在日本人社会の言語生活、ボリビア沖縄系移民における言語接触の実態を検討しようとするものである。また移民社会研究においては文化人類学的観点からの補強が必須であることから、海外共同研究者との連携により、国際的かつ学際的研究としての要件を充足している。特に国際的観点からすれば中国・韓国系のエスニシティを中心とするニューカマーの存在は、移民研究において不可避の検討課題である。かかる問題意識をもとに海外共同研究者の積極的な

協力を加えて、幾層にもわたる日本語の多様性についての言語接触の実態が明らかになるものと思われる。なお、南米の沖縄系移民社会においては急速に同化が進んでおり、とりわけ日系一世の人口は激減の一途であり、国内における諸方言消滅の危機については贅言を繰り返すまでもない喫緊的課題である。本研究はかかる危機意識をもとに、先の共同研究の創造的発展を期すべく編成されたものと位置付けられる。

2. 研究の目的

いわゆる「国語」として理念的に存在する日本語に対して、国内諸方言の実態のみならず、海外での移民社会や多言語文化圏の「日本語」についても注目すべきであるということは、言語学に限らず人文系諸学における共通理解ともなっている状況である。しかしながら、こうした日本語の多様性について包括的に把握されることはこれまでも極めて限られたものであった。これは精緻な理論的枠組と憶断を排した実証的研究が不可避である以上、言語学史的に見ても必然性があり、かつ国際的に見ても大いに有力な論証性を提示するという、言語事実を十全に記述し得る言語理論が前提となるからである。本研究ではかかる前提をふまえ、国際的にも大いに多様化の進んでいる日本語のバリエーションの問題について、言語類型論 (Language Typology)、言語接触論 (Contact linguistics) の立場から包括的に考察を試みようとするものである。これらの理論はバルカン諸語、チュルク諸語といった中心的ヨーロッパ諸語ではない言語に関する精緻な言語記述の成果と、文法化 (grammaticalization) の研究進展を背景にしており、とりわけ危機言語・マイノリティの言語に対する精緻な体系的記述に対して、極めて有効な視座をもたらすものと思われる。さらに本研究では、日本語の多様性をもたらす外的要因の一つである「社会移動」の観点からも、主として文化人類学における移民研究の成果を取り入れつつ、家族という言語主体単位に注目することで、言語生活の立体構造把握を企図している。

先に組織された国内共同研究である「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究」「方言における述語構造の類型論的研究」によって、日本語の文の中核をなす<述語>の総合的記述が可能となったが、本研究は<主語><補語>に関わる日本語のバリエーションの記述による文構造の総合的把握を目的とする。具体的には、方言におけるゼロ形式の頻用や形式名詞の文法化、さらには沖縄・奄美諸方言における「係り結び」現象などを言語類型論的に考察することにより、単に「とりたて」と取り上げられてい

た事象を、日本語特有ではない普遍的文法現象として「格」と統合的に把握することが可能となるものと思われる。すなわち日本語の case と focus の問題を、世界における諸言語の動向を押さえた上で言語学的に記述することを目的としている。その上で、伝統的方言体系の変化と標準語の浸透による変化の問題について、沖縄におけるウチナーヤマトグチを中心に考察することにより、これまでの標準 (中央) 語中心の構文論を相対化するという言語類型論・言語接触論的成果が期待できるものと思われる。さらに、国内諸方言の研究と海外の日本語 (海外方言融合) に対する調査研究をリンクさせることにより、両者の異同から析出される言語学的知見を言語生活論やエスニックアイデンティティといった問題と関連付けることで、一層浩瀚な日本語の多様性に関する分析がなされるものと思われる。本研究は、かかる意味において画期的意義を有するものであると位置付けられよう。

3. 研究の方法

本研究では、言語理論と言語事実とが乖離しない総合的研究組織の構築を図るべく、以下3班による相互連携した組織を構成している。これらは常に研究会等を通して、理論と事実の比較検討を行う。

(1) 「言語接触論に基づく日本語学研究方法論の構築」班 (工藤、吉村、山東、佐藤)

①本研究総括としての国際・国内研究報告会の実施：海外からの研究者も招待して年4回開催する。

②言語接触論関係文献講読をふまえた日本語学的研究方法論の構築：上記研究会で報告・検討する。

(2) 「脱中心性の視点と日本語—複数の日本語としての方言—」班 (工藤、木部、狩俣、金田、佐藤)

①ブロック型組織に基づいた方言全国調査：昨年度に引き続き、東北から沖縄における主要地点の調査を実施する。

②方言調査を中心とした国内研究報告会の実施：「格」と「とりたて」に関する総合的記述のあり方を検討し、述語構造との関係の理論化を行う。

(3) 「社会移動と言語接触—在外社会の日本語—」班 (工藤、林、山東、三ツ井)

①言語接触論的観点からの在外駐在日本人の言語生活調査：昨年度トリア、チュービンゲン (独) で実施した談話録音の文字化を行

い、報告書としてまとめる。

②韓国における九州方言を中心とする日本語と朝鮮語の言語接触に関する文献調査を行い、言語接触の有り様をタイプ化する。

③ブラジル・ボリビア日系社会における言語接触ならびに方言接触に関する諸成果との突き合わせを行い、総合化を図る。

4. 研究成果

(1)初年度については、研究分担者・研究協力者に対し、研究テーマに関する一層のコンセンサスを得るべく、ハイネ、クライン等の言語接触論関係文献に中心とした、一部公開の文献講読会を定期的実施した。かかる準備を経て、言語接触論に基づく日本語学研究方法論の構築を試みた。また、従前の調査研究をふまえた、格やとりたて構造に関する言語項目調査について、東北から沖縄に至るまでの諸方言に適用できる、言語学的ならびに社会言語学的方法論に基づく「統一した調査票」の改善についての検討を行った。さらに調査研究の充実を図るべく、研究協力者との連携のもと、ブラジル連邦共和国南マットグロッソ州カンボグランデ市の沖縄系コミュニティ、ならびにボリビア共和国サンタクルス県オキナワ移住地を対象に、そのコミュニティの形成過程を踏まえた上で、コミュニティの生活世界とそこでの言語的日常生活を描くエスノグラフィ的研究を実施した。

(2)次年度では、言語理論と言語事実とが乖離しない総合的研究組織の構築を図るべく、「言語接触論に基づく日本語学研究方法論の構築」班、「脱中心性の視点と日本語－複数の日本語としての方言－」班、「社会移動と言語接触－在外社会の日本語－」班をそれぞれ中心としつつ相互連携した組織を構成し、研究会等を通して以下の理論と事実の比較検討を行った。

「言語接触論に基づく日本語学研究方法論の構築」班においては、本研究総括としての国際・国内研究報告会の運営・実施、言語接触論関係研究文献調査、言語接触論関係文献講読をふまえた日本語学的研究方法論の構築について検討を行った。

「脱中心性の視点と日本語－複数の日本語としての方言－」班においては、調査研究体制の組織化、ブロック型組織に基づいた方言全国調査、方言調査を中心とした国内研究報告会の運営・実施を担当した。

「社会移動と言語接触－在外社会の日本語－」班においては、ドイツをフィールドワークとする、言語接触論的観点からの在外駐在日本人の言語生活調査を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計14件)

- ① 金田章宏、沖縄西表島(祖納)方言の格ととりたての意味用法、琉球の方言、32、2009、1-30、査読有
- ② かりまたしげひさ(狩俣繁久)、波照間方言と与那国方言の形容詞語尾を言語接触からみる、南島文化、31、71-80、2009、査読有
- ③ 佐藤里美、一語文的な名詞文の意味・機能、日本東洋文化論集(琉球大学法文学部紀要)、15、1-31、2009、査読無
- ④ 工藤真由美、言語接触と文法的変容－日本語の多様性をめぐって－、日本文化研究(東アジア日本学会)、28、5-20、2008、査読有
- ⑤ 工藤真由美、認識的モダリティーと情報構造、日本語文化研究(北京大学日本語文化系・北京大学日本文化研究所編)北京大学日語学科成立60周年国際研究会論文集、13-20、2008、査読有
- ⑥ 木部暢子、方言イントネーションの記述について、方言研究の前衛(桂書房)、443-459、2008、査読無
- ⑦ 木部暢子、薩摩の漂流民ゴンザのアクセントについて－複合語のアクセント－、日本語の探求－限りなきことばの智慧－(北斗書房)、333-340、2008、査読無
- ⑧ かりまたしげひさ(狩俣繁久)、トン普通語・ウチナーヤマトウグチはクレオールか－琉球・クレオール日本語研究のために－、南島文化、30、56-65、2008、査読有
- ⑨ かりまたしげひさ(狩俣繁久)、名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて－ga格、nu格、ハダカ格、jaのとりたて形－、日本東洋文化論集(琉球大学法文学部紀要)、14、1-80、2008、査読無
- ⑩ 八亀(吉村)裕美、時間的限定性、月刊言語(大修館書店)、37-8、42-47、2008、査読無
- ⑪ 工藤真由美、複数の日本語という視点から捉えるアスペクト、月刊言語(大修館書店)、36-9、32-39、2007、査読無
- ⑫ 木部暢子、福岡市アクセントの平板化、国文学解釈と鑑賞、72-7、133-137、2007、査読無
- ⑬ 木部暢子、九州方言、日本語学(明治書院)、26-11、192-193、2007、査読無
- ⑭ 山東功、日本語学の構築、日本語学(明治書院)、26-10、14-21、2007、査読無

[学会発表] (計2件)

- ① 工藤真由美、愛媛県宇和島方言の可能形式－努力による実現を明示する形式を中

- 心に一、第 88 回国語語彙史研究会、
2008. 4. 26、花園大学
- ② 山東功、日本における非言語コミュニケーション研究の系譜とその意味、中日非言語コミュニケーション国際シンポジウム、2007. 5. 24、中国海洋大学（中国）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 八亀（吉村）裕美、明治書院、日本語形容詞の記述的研究－類型論的視点から－、2008、250p.
- ② 工藤真由美・八亀（吉村）裕美、複数の日本語－方言からはじめる言語学－、2008、205p.

〔その他〕

林明子、科学研究費補助金研究成果報告書、言語接触論的観点からのドイツ語圏言語生活調査、2009、229p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 真由美 (KUDO MAYUMI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30186415

(2) 研究分担者

金田 章宏 (KANEDA AKIHIRO)
千葉大学・国際教育センター・教授
研究者番号：70214476

狩俣 繁久 (KARIMATA SHIGEHISA)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：50224712

木部 暢子 (KIBE NOBUKO)
鹿児島大学・法文学部・教授

佐藤 里美 (SATO SATOMI)
研究者番号：00274879

山東 功 (SANTO ISAO)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：10326241

林 明子 (HAYASHI AKIKO)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：60242228

(3) 連携研究者

吉村 裕美 (YOSHIMURA HIROMI)
京都光華女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60346153

三ツ井 崇 (MITUI TAKASHI)
同志社大学・言語文化教育研究センター・講師
研究者番号：60425080